

東京の羽根

小川未明

青空文庫

東京のお正月は、もう梅の花が咲いていて、お天気の良い日は、春がやってきたようにさえ見えるのであります。義雄さんは、隣のみね子さんと羽根をついていました。

みね子さんは、去年学校を出たのでした。きようはお店の公休日です。叔母さんのお家へいつてきたといつて、きれいな着物を着ていました。義雄さんは、まだ来年にならなければ、学校を卒業しないのであります。

「いいかい、こんど落としたら罰に、たたくのよ。」

「義雄さんこそよくつて。さあ上げてよ。」と、みね子さんは、ポンと羽根をたたきました。打ち方がよくなかったので、羽根が

横よこへそれてしまいました。

「あ、ごめんなさい。」と、みね子こさんは、おわびをしましたが、義雄よしおさんは、素早すばやく走はしつて、その羽根はねを力ちからまかせに打うち返かえしました。けれど、羽根はねは、みね子こさんの方ほうへはいかずに、往來おうらいの方ほうへ飛とんでゆきました。ちょうど、そのとき一台だいのトラックが走はしつてきましたが、羽根はねは、そのトラックの上うえの荷物にもつの蔭かげに落おちて、トラックは、知しらずにそのまま羽根はねをのせてかなたへいつてしまいました。

「いいよ、僕ぼく、新あたらしい羽根はねを持もつてくるから。」という義雄よしおさんこえの声を、トラックの上うえに乗のつてしまった羽根はねはうしろの方ほうでできたのであります。

「いったいおれは、これからどうなるのだろうか。」と、羽根はねは、おも思つたのです。

そのトラックは東とうきよう京きやうから砂糖さとうの荷にを積つんで田舎いなかの町まちへいくところでした。その田舎いなかのお正しょう月がつは、なんでも東とうきよう京きやうよりひとつきは一月おくれて、これからその町まちに住すむ人たちは、お正しょう月がつの用意よういにとりかかるのでした。

羽根はねは、車くるまの上うへからさびしい霜枯しもがれの野原のはらを見みました。田圃たんぼの間あいだを通とおる道みちは霜解しもどけがして、ぬかるみになっていました。笠かさをかぶつた人ひとや毛布もうふを着きた人々ひとびとが、トラックがくるとあわてて道みちを開ひらいて、どろのとばしりをかけられまいとして、うらめしそうに見送みおくるのでした。並木なみきの頭あたまに止とまったからすがこの有あり様さまを見下みお

ろしていました。羽根^{はね}は、なんだかからすが、自分^{じぶん}を「どこへいくのだろう。」と、じつと見ているような氣^きがしました。

「からずさん、私^{わたし}をもう一度都^どへつれていつてくれませんか。」
といって、頼^{たの}もうとするまに、トラックは、走^{はし}つて、からずは後^{うし}ろになつてしまいました。

あちらの山々^{やまやま}には、真^まつ白^{しろ}の雪^{ゆき}がきていました。昼過^{ひるす}ぎに、トラックは、小^{ちい}さなさびしい町^{まち}の間屋^{とんや}の前に止^とまりました。問屋^{とんや}の人^{ひと}たちが出てきて、荷物^{にもつ}を下^おろしました。運転手^{うんてんしゅ}も車^{くるま}から下^おりて、荷物^{にもつ}を下^おろすてつだいをしました。このとき、白^{しろ}と赤^{あか}のまじった羽根^{はね}が、荷^にの間^{あいだ}から出^でてきました。

「やあ、どこで、こんなのが乗^のったかな。」と、眼鏡^{めがね}をかけた、

うんてんしゅ
運転手は笑つて、ポンと往来に投げました。

羽根は、ちょうど都の空で、義雄さんと、みね子さんに突かれて、ひらひらと空に翻つて落ちたときのようなかつこうで地面へ落ちたのでした。

往来では、勇坊と時子さんが、寒そうに懷手をして遊んでいましたが、羽根が落ちてくるとすぐに二人は、走り寄りました。

「東京の羽根だ、二人でついて遊びな。」と、運転手は、笑いました。

「東京の羽根だつてさ。」と、時子さんは、目をまるくして、なつかしように手に持った羽根を見つめました。

「東京^{とうきよう}は、お正^{しょうがっ}月^{げつ}なんだね、この自動車^{じどうしゃ}は、東京^{とうきよう}

からきたんだ。」と、勇坊^{ゆうぼう}は、どろのはねが、おびただしくつ

いたトラックを物珍^{ものめず}しそうにながめました。

わたしえ
「私家^{わたくしえ}へいって、羽子板^{はこいた}を持つてくるわ。」

ときこ
時子^{ときこ}さんは、二つ羽子板^{はこいた}を持つてきました。二人^{ふたり}は、羽根^{はね}をつ

いていました。すると、近所^{きんじよ}の子供^{こども}たちが集^{あつ}まつてきて、

「もう、羽根^{はね}をついているの？」といつて、ききました。

みんなは、かわるがわる、その羽根^{はね}をついて遊^{あそ}んでいました。

そのうちに、羽根^{はね}は、どうしたはずみか屋根^{やね}の上^{うへ}へ飛^とんで、とい

の中^{なか}に落^おちてしまいました。

「あ、どこへいったらう、見^みえなくなつたわ。」

「といの中へ落^おちてしまったんだ。」

子供^{こども}たちは、さおを持^もつて来^きましたが、羽根^{はね}は中^{なか}へ隠^{かく}れて、下^{した}からは見^みえませんでした。

子供^{こども}たちが、あきらめて散^ちつてしまった時分^{じぶん}には、自動車^{じどうしゃ}の姿^{すがた}も見^みえなかったのです。

寒^{さむ}い風^{かぜ}が吹^ふいて、なんとなく雪^{ゆき}の降^ふりそうな空模^{そらもよう}様でありました。

「ガア、ガア。」と、あちらの森^{もり}の方^{ほう}で、からすの鳴^なき声^{こえ}がしていました。

だれもいなくなると、どこからかからすが飛^とんできて、羽根^{はね}をくわえてゆきました。

「あ、さっきのからずさんですね、私を東京のお家へつれて
 いてください。」と、羽根は、たのみました。けれど、からず
 は、羽根のいったことが耳に入らなかったように遠方の森の中
 へ飛んできて、いちばん高い木の頂にあつた、自分の巢の中へ持
 つてきました。羽根は、生まれてからこんな高いところへ上がつ
 たのは、はじめてです。

東京にいる時分、羽子板で打たれて、空へ舞い上がるたび
 に、もつと、もつと高く、あの茜色の美しい空へ上がるこ
 ができたらと、高いところにあこがれたことがありました。いま、
 その望みがかなったけれど、あまりにもさびしいのです。羽根は、
 木の頂から、四方の景色をながめていました。寒い風が、ややも

すると羽根^{はね}をさらっていきそうです。この後^{のち}、羽根^{はね}は、どうなる
でありますでしょうか？

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 11」講談社

1977（昭和52）年9月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「小学文学童話」竹村書房

1937（昭和12）年5月

※表題は底本では、「東京《とうきょう》の羽根《はね》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2016年12月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

東京の羽根

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>